胎内回帰で
新しい人生を！
条河麻耶の子宮編

木組みの街の、ある一つの噂。
僕はとある理由から、
その噂を見つけ
そして、誘われるようにこの街に
やって来た。

……までは良いものの、
誰かにその噂を
尋ねるわけでもなく、
あてもなく街をさまよい
きれいな街並みを眺めて
いるだけだった。

歩き疲れて、
街並みを見渡せる
公園のベンチで
一休みしていると……

「あやしいおにーさん発見！
さっきから何してるの？
理由を言わないと、
警察呼んじゃうよ！」

ふと一人の女の子が
話しかけてきたのだ。

「あ、あのっ！僕はその……」
えーと、この街の噂に
興味を持って、
来てたんだけど……」

「ふうん……それって
どんな噂かな？」

こんな子にいうのは
ためらわれるのだけど……

ええい、ままよ！

「生まれ変わりができる
街って……」

「……！！
なぁんだぁ！
そうなら早く言ってよー！」

どうやらこんな少女でも
噂については
知っているらしい。

「要するに……
女の人に声をかけ
づらかったから、ずっと
街中観光してたんだ！」

「そ、そういうことです……」

「ねえ！私でいいなら
その噂を実際に確かめさせて
あげるけどっ……！」

「えっ！　い、いいの？」

　もしかして……
この子はこうみえて
色々と経験豊富なのかも？

「女の子は授業で習うんだけど
聞いても、
よくわからなかったんだよねー。
で、そういうときは……
実際に試すのが一番！
そう思うでしょ？」
「はは、そうなんだ……
うん、そう思う」
「やった！……よーし、
そうと決まったら……
ついてきて！
あっ！私は条河麻耶！
よろしく～！」
「よ、よろしく……ぼくは……
あっ！」
「ほらほらーこっちこっち！」
ぐいぐいと腕を引っ張られながら、
僕たちはとある場所に向かっていった。

僕たちは一見なんの変哲もない集合住宅の建物にたどり着いた。

麻耶ちゃんは、色々察した顔をした受付の人と話をして、鍵を受け取る。

そして、「さ、こっちだよー！」と言ってその鍵の部屋目指してズンズンと進んでいった。

「着ーいたー！あっほら、ここに荷物置いて！こっちがお部屋だよ！早く～！」

「あ、あのここってもしかして……」

「お～！こうなってるんだ！」

部屋の中には
アロマが焚かれているのか、
何とも言えない良い香りが
広がっていた。

そして部屋の中央では
大きなベッドがデンっと、
存在感を放っている。

「やっぱりここは……
ラブホテ……」

「じゃあ早速始めちゃおうよ～！
明日も学校あるし！」

「あっ！」

　言うが早いか、
帽子をぽいっととったと思ったら、
続けざまに服を脱ぎ始めたのだった。

麻耶ちゃんにつられるように
僕も服を脱ぎはじめた。
部屋に漂う香りのせい
なのだろうか、
思考がぼんやりしていて、
抵抗感が薄れて
いるようだ。
が、やはり最後の一線を
越えるのは抵抗があって、
パンツは脱げないでいた。
なにより、中身が
大変なことに……
「あーもう、最後の一枚じゃん！
早く抜いじゃいなよー！」
麻耶ちゃんはちょうど
上の肌着を抜いでいるところだ
かわいらしいおっぱいを
恥ずかしがる風でもなく
僕の眼前に晒していた。

「……っ！」
思い切ってパンツを下ろす。
これからするであろう
ことへの期待や、
目の前でかわいく
ゆれ動く小ぶりの
おっぱいに僕のものは
すでにギンギンに
勃起していた。
「おおっ！！すごーい！
うちでみたのとはちょっと
違ってるー！」
彼女はそそり立つ
息子を凝視していた。
「えへへ、準備は万端みたいだねー！
じゃあさっそく始めよっ！
それー！」
そう言うなり、
ぼくはベッドに
押し倒された。

「ねー、ちんちんさわらせてっ！」
「はうっ！！」

　この部屋に入ってから、
ずっと興奮状態にあった僕のペニスは
少し触られただけでもう射精寸前だった。

「……へーこうなってるんだー
あっ！ぴくぴくしたっ！」

「ちょっ！そ、そんなに触ると！！」

「しゃせー？っていうんだっけ、
精子でるとこ　見せてー！」

「うっ……そ、そんなにしたらっ」

　指がペニスに触れただけでも
気持ちいいのに、
さらに拙い手つきながら
ぼくのペニスを上下にしごく。

「ああっ……だめ、もう出るっ！」

「おおっ！すごーい！」
情けなくも、少女の手コキで
盛大に射精してしまった
「こんなに勢い良く
でるんだっ！」
「はあはあ……」
いつもよりも
大量の精液が出たように思う。
「……あ、ちんちんが
やわらかくなってきた……
ちょっと待たないと
私の中に入れるのは無理かなー？」
「はぁ……少し休まないと……
元にはもどらないかも……」
どぴゅ

「じゃあちょっと
休んだほうがいいんだね～」

「ゴメン……」

「いいよ～、あっ……そうだ！
ちょっと精子舐めていい？」
「えっ？あ！」

　返事をする前にさっと、
指ですくい取った精液を
ためらいなく口の中へ運ぶ。

「ん～……変な味っ！
ちょっと生臭いかな？」

「あはは……生きてるからね。
それより、この後具体的に
何をするのか気になってて、
聞いておきたいんだけど……」

「あっ！そうだねっ！
ちんちんがもとに戻るまでに、
説明するね～！」

「頼みます……」

「じゃあちょっとそこ
どいてどいて～！
私が今度は見せる番だよっ！」
「え？う、うん……」

　僕が起き上がると、
ベッドにさっと寝っ転がり、
ぼくに見せつけるように
ためらいなく股を開いた。

「じゃあ……説明するねっ！」
「う、うん」

「まず……決まった場所に行って
エッチするでしょ？
……ほら、ここに坊やのちんちん入れる
穴があるんだよっ！」
「うん……」

「そうしたら、エッチした人がなかで
赤ちゃんになるんだって！」

「そ、そう……なんだ？」

「で、出産しておしまい！」

「え？うーん
どうしてそうなるのか
よくわからないや……」

「だよねー！だから
確かめたほうが
早いんだってー！」

「な、なるほど……」

年齢のことを考えれば、
具体的なことはもっと
あとの学年で、
と段階的な手順を踏んで
教えていこうということ
なのだろうけど……

それが逆に麻耶ちゃんの好奇心を
刺激して、実践してみようという
気を起こさせてしまったのだろう。

「えーと、そういえば
ぼうや？……ってぼくのこと？」

「そうだよっ！私のなかでおにーさんは
生まれ変わるんだから……
おにーさんは私の
子供になるでしょ？」

「そ、そうだね……
言われてみると確かに」

「だから、おにーさんは
“坊や”なんだー！
私のことは
ママっ……て呼んでいいよ！
さあ、呼んでみてっ！」

期待に満ちた眼差しが
僕を射抜く。

「ま……ま、ま……」
「えー聞こえないよ～♥」

恥ずかしくて若干の抵抗を
覚えはしたが、
この部屋に漂う香りと
雰囲気に飲まれて言葉が出た。

「ま、ママぁ！」

「うんっ！えへへー
なんだか、照れるなー♥」

照れた表情の彼女に
僕は母性を感じてしまう
のだった。

「それで、僕がオチンチンを
入れればいい穴は……」

「んっ……ほらぁ」

「よくわからないよ……
もっと近くで見てもいい？」

「う、うん……ここだよっ！」

「こ、ここに
入れればいいのかな？」

眼前にピンクサーモンの
きれいなオマンコが迫る。
興奮して鼻息が荒くなって、

「ひやっ！こらぁっ！
息がくすぐったいよ～！」

息が当たるたびに
ひくひくっと
可愛らしくひだが
震えていた。

「んっ……レロ……」
「ふわわっ！？な、なんで舐めるのっ！」

つい自然に舌が膣の
入り口に伸びていた。

「え、えっとエッチするとき、
オチンチンを入れやすく
するために……」

「んっ！な、なら仕方ないっ……
あっ！ふぁ！？　っ！」

「これがママの味……
んっ……美味しいよ……」

「あ、味を確かめちゃっだめぇ」

「ママだって精子の味、
そのお返し
んちゅ、ンムっ……

あ、オチンチンも
また大きくなってきた」

「んっ！も、もう十分でしょっ！
ちんちん戻ったなら
エッチするよっ！」

そういって僕の舌から
逃れるように身体をずらすと、
さっと起き上がってしまった。

「よーしっ、ちゃんと
ちんちん元に戻ってるね！」

　ペニスの硬さや
大きさを確認して
僕の上にまたがると、

「坊やはねっ！
ママにまかせて、
じっとしてればいーの！
さっきみたいのは……
ダメだからねっ！」

　ママからのおしかりを
受けてしまった。

　舌で感じたことに対する
照れ隠しも含まれて
いるんだろう。

「ご、ごめんなさい……
調子に乗りすぎたかも」

「ならいいよっ！
許してあげまちゅよ～♥
よーし！
じゃあ……これから
私の中に……
帰らせてあげるからねっ♥」

　そう言って
　ペニスを膣の
入り口にあてがった……

「んっ！私の中にい……
おかえりなさっ……いっ♥」

処女膜を突き破って、
ペニスは温かい
胎内に導かれた。

「ああっ……ママの中にっ
んはっ！
オチンチンが入ってる！」

精子がまだ出て
ないのに何かが体内から
吸い出されている感覚。

そしてそれは、ものすごく
気持ちが良かった。

「あはっ！私の中に
なにか流れ込んできてる♥
これって……
精子じゃないんだよね？」

「ちっ……
ちがっ！
あっ！
吸い取られて
いくうっ！」

「じゃあ坊や自身が
入ってきてる
のかなぁ……
んっ♥
とっても、
暖かくて
気持ちいいよ！」

ズブブッ…

ズッ

「イくっ……精子もでるう……
はっあああああっ！！」

「おっ……おお―っ
精子も入ってきたぁ♥」

「いっ、ままで以上に
吸い取られるっ！
射精するのがいつまでも
続くようなっ……
とまらなっ
ぐっ……くううう」

ペニスを通して
僕の中から何もかもが
ママの中に
流れ込んでゆく！

「あっ……さっきよりも
どんどんきてるっ！」
んっ♥　お―……
おおおっ♥」

「あはっ！
すごーい！
お腹膨らんできたぁ♥」

「うっ……はああっ！
身体が熱いっ！！」

「坊やの身体も
縮んできたんじゃない？
どんどん小さくなってる！
そっかー……
このまま私の中に
取り込んでいくと
赤ちゃんになるんだ！」

「あっ……はあっ！
こ、こんなことが！
んっ！あああっ！！」

幻覚なのか
本当のことなのか……
そんなことはどうでも
良くなるくらいに
気持ちよく、
そしてだんだん思考は
鈍くなってきていた。

「ん―……
このままだと
もっと小さくなったときに
押しつぶしちゃうかも……
姿勢を変えるねっ！」

「んっ……はあはあっ！」

もはや無我夢中で
腰を擦りつけるように
密着しているだけだった。

身長はすでに逆転していて、
腕を回しても届かないだろう。

「あはっ！大分小さくなったねー
もうちょっとでママの
お腹の中に帰れまちゅよー♥」

ママのお腹も
ぽっこりと膨らんでいて、
これまでどれだけ僕自身が
流れ込んでいったのだろう……

「あっ！ママっママあっ！！
んっ……くううう♥」

「あっ……また射精してるー
んっ♥お腹の中に
すっごく流れ込んで
きてるー♥」

射精するたびに、
自分自身も流れ出る
勢いが増しているのがわかった。

「ほーら……あともうちょっとだよー♥」

しこうがにぶくなってきていて、
もうあんまり
かんがえることができない。

「がんばれがんばれっ♥」

「あっあっ！
ママのなかに……」

はいっていくのだな……
とかんじたあとに、
ぼくのいしきはいったん
とぎれた……

「ふえー……
本当に全部入っちゃった！」

「お腹すっごい膨らんじゃったよー！
これが妊婦さんになった感覚かぁ……
体重増えてるよね？
ちょっと体重いかも♥」

「……坊やはどうなったんだろ？
ちゃんと私の胎内にいるのかな？
おーい？
聞こえるー？」

……

……

まどろんでいた意識が
だんだんとはっきりしてきた
ぽんぽんっと、
規則的な音が響く。
不快ではない。
やさしく母親に
朝起こされるかのような……

　そして僕は再び目覚めた。
ママの胎内で。

（すっごく温かい……ここは？）

「おお、声が聞こえる！？」

（……ママの……胎内なのかな？）

「そうみたいだねー！
元の記憶はあるの？」

（うん……しっかり）

「そっかー！よかった♥
生まれ変わりって言っても
別の人になったら
意味ないからねー

……で、私の胎内って
どんな感じ？」

（暖かくって……
ぷよぷよしてて……
ふわふわ浮いて
いるみたいで
とっても
気持ちいい……）

「へー……
そうなんだぁ♥」

（僕の身体どうなってるんだろう……
ちょっと動かしてもいい？）

「んっいいよー♥」

　自分の体がどうなっているのか
確かめるために手足を動かしてみる。

　といっても、柔らかい壁が
ぴったり自分に合わせて
包み込んでいる感じなので、
そう自由に動かせる
ものではないけど……

「あははっ！こらぁ、
くすぐるなぁ！
お腹のナカっ！
くすぐった！
あははっ！」

　ちょっと壁を
押し込んでみたら
どうやらくすぐったく
感じるみたいだ。

「はー……くすぐったかったぁ……」

いろんなポーズを試した所、
身体をまるめるようにする姿勢が一番
安心できてゆったり
できるものだとわかった。

（はぁぁ……
このままずっと中に
居たいくらいだなぁ……）

「……それはっ
……だめだよ！
私が学校に
いけなくなるし……
それに坊やだって、
ずっと今のままでいいと
思ってなかったから……
生まれ変われるならって
自分を変えられるかもって
思ったから
この街にきたんだよね！」

（うん……）

「なら、でなくちゃ！
大丈夫！私の坊やに
なったんだから、
きっと、もっともっと
外の世界が
楽しくなれるよ！」

（……わかった！
僕出るよ！
ママの期待に
答えるためにも！）

「ほーら、出ておいで～」
僅かな隙間から差し込む
光に向かって頭を向ける。
「あっ！んんっ！
アソコ広がってきてるー
坊やが下に降りてきてるの……
わかるよ♥」
（んっ！んしょっ！
ママは……痛くない？）
「あー……
なんか大丈夫みたいっ！
すっごく広がってる！！
って感じるのに、
全然痛くないよっ！
だから、そのままもっと
頭を出してきてー♥」

「んふうう〜っ♡」
（あっ……まぶしい……）
視界いっぱいに光が降り注ぐ
胎内から外へ頭が
出たんだってことが
はっきりと感じとれた。
「頭が外に出たあっ♡
あともうちょっとだねっ！」
（あっ身体も出そう……）
産道を通るときに
サイズが一番大きい
頭が出たためか、
身体が出るのは
それよりも楽だった。

「んっ……どう？
自分で最後までできる？」
（がんばって……みるんー！！
もうちょっ……と！）
自分の手を使って這い出る
赤ちゃんなんて
前代未聞だろう。
ママのお尻に手をついて、
ぐっと力を込めて体を
胎内から出そうとする。
（んっ……くっ！）
「はあっ！あっ…♡
お腹軽くなってきてる……♡」

「んんーっ♡
わぁ……身体かるくなったぁ♡」
（あっ！でるっ！！）
さいごは重力にまかせるままに
ずるるっと
下半身が胎内から飛び出した。
「ふうう……よくがんばったねー♡
わぁ！本当に赤ちゃんだっ！
ていうか、髪の色変わってる!?」
まだへその緒でママとは
つながっているけど、
僕は再び外の世界に戻ってきた。
ママの遺伝子を受け継いで……

「ほーらよしよしママの
おっぱいでちゅよー♥」
出産すると同時に
ママは母乳が
出るようになった。
「んまんま……」
胎内の温かさも良かったけど
こうして腕に抱かれて
触れた肌から伝わる
体温を感じるのも
気持ち良いものだ……
「んー……
ちゅるるっ！」
乳首に口を当てて、
まだ歯の生えていない
口で吸い付いて夢中で
母乳を口の中に送り込む
「んっ！そんなに強く吸っちゃ
ダメだったらぁ♥」
ママの母乳は
いつまでも飲んで
いられそうな
ほど美味い。
そして吸っているかぎり
ずっと出続けてくれる
のではというくらいに
次々に溢れ出た。

「ふう……すごい♥
もうこんなに
大きくなってきたぁ……
腕が疲れてきちゃう♥」
「んーママぁ♥」
いつの間にかへその緒での
つながりは途切れていた。
母乳を吸えば吸うほどに
身体は大きく……
いや、戻りつつあった。
「もうちょっとで
元の大きさに
もどれるねー♥」
「んっ……」
「あんっ♥
いやいやしても
っだめだよぉ♥」
ダメだと
思っていても……
首を振って
駄々をこねるのを
せずには
いられなかった……

「んっ……んむぅ　ママぁ」
「んっ！もう！もとの大きさに
戻ってる！
私、もうおっぱい出ないよぉ♥」
とっくに母乳は出なくなっている
ことはわかっていた。
でも、ずっとしゃぶって
いたいんだ。
「……どう？頑張れそう？」
「ん……ママのおかげで
気持ちがスッキリした……
なんであんなこと
考えてたんだろ。
色々考えが浮かんできた」
「そっかぁ……
じゃあもう、これからは、
後ろ向きな考えは禁止！
わかった？」
「……うんっ！」
「なら、もう少し吸っててもいいよ♥」
そうして僕は
ママのおっぱいを
心ゆくまで堪能した。

「……もうお別れだけど、
なにかあったら
ママに相談してよね？

私たちはもう、
他人じゃないんだから！

ときどきこっちに来て、
坊やのお話きかせてねっ！」

「わかったよ……絶対またくる！
じゃあまた……ママっ！」

「うんっじゃあねっ！」

この世に絶望して、
いっそ生まれ変われたら……
そう思ったからこそ
噂に導かれここまで
たどり着いた。

ここはそういう人たちを
文字通り生まれ変わらせ、
救ってくれる、

優しさに満ち溢れた街だった。

そして、僕も
新たな絆を手に入れた。

--おわり